

博士論文要旨

1. 研究目的

便秘症状を有する 20・30 代女性において、便秘薬の内服の有無による排便状態と QOL の状態及び、40℃の腰部温電法による排便状態と QOL への効果について検証する。

2. 研究方法

日本語版便秘評価尺度(Constipation Assessment Scale: 以下 CAS とする)5 点以上で、便秘症状がある 20・30 代の成人女性 120 名(薬剤あり群 60 名、薬剤なし群 60 名)を、電法群とコントロール群の 2 群にランダム割り付けを行った。研究期間は 4 週間(非介入期、介入期各 2 週間)とし、電法群は介入期に毎日 5 時間蒸気温熱シートを腰に貼用した。

便秘症状は日々の排便記録と CAS で測定を行った。QOL は便秘に関する QOL 評価指標 Constipation QOL15(以下 CQ15)と SF-36 及び、衣食行動と排便状態に対する満足度を測定した。分析は群間比較には t 検定及び Mann-Whitney の U 検定を行い、群内比較は t 検定及び Wilcoxon の符号付順位和検定を行った。電法効果の継続性は、反復測定二元配置分散分析を行い、効果モデルの作成には共分散構造分析を行った。

聖路加看護大学研究倫理審査委員会の承認を受けた(承認番号 11-085)のち、対象者に研究内容について説明し、同意書に署名を得て研究を実施した。また、UMIN(University hospital Medical Information Network)臨床試験登録システムに登録した(UMIN 試験 ID: UMIN000007823)。

3. 研究結果

研究対象者は、薬剤あり群 39 名(電法群 21 名、コントロール群 18 名)、薬剤なし群 50 名(電法群 24 名、コントロール群 26 名)の合計 89 名であった。

薬剤あり群と薬剤なし群の排便状態は、薬剤あり群で CAS が高く($p=0.066$)、自覚的な便秘症状が重症である傾向があった。QOL は薬剤あり群において CQ15 ($p=0.003$)、CQ15 身体的側面($p=0.033$)、CQ15 精神的側面($p=0.001$)、SF36 の活力($p=0.021$)、心の健康($p=0.008$)は有意に低かった。

40℃腰部温電法は CAS を有意に改善させた。薬剤あり群では、さらに排便日数($p=0.004$)、排便回数($p=0.017$)も有意に改善した。QOL への効果では CQ15 の身体的側面を有意に改善させ、さらに薬剤あり群では CQ15 の精神的側面($p=0.006$)、食事内容の選択への制限($p=0.017$)、便秘に対する満足感($p=0.024$)も有意に改善した。便秘薬の使用量や副作用症状の改善は認められなかった。共分散構造分析の結果、薬剤あり群では温電法による直接効果は<排便状態の不良>と<心の健康>に認められ、薬剤なし群では<身体精神的負担感>に対して認められた。

4. 結論

便秘症状を有し便秘薬を内服する対象者では、便秘薬を内服しない対象に比較して自覚的な便秘症状は重い傾向にあり QOL は低かった。便秘症状を有する成人女性への 40℃の腰部温電法は、排便状態と QOL を改善させ、薬剤あり群でその効果が大きかった。